

祝

2014年7月 早稲田大学博士号(学術)取得

原良枝さん(取得時55歳)

【論文テーマ】音声読書としての朗読研究 ―その文化的側面と可能性―

朗読は、人前で話す力はもちろん、聞く力やコミュニケーション力も養う

原良枝(本名・小林良枝)さんは、テレビ神奈川の局アナとして、その後もフリーアナウンサーとして活躍してきた。しかし、日々言葉が自分を通り過ぎていくことの不安が常にあり、確固としたよりどころが欲しいと感じていた。また、話すことを何か教育で役立てられないかとも思っていた。そうしたときに「縁があり、大学で講師として教える機会を得た。その際、それまでの蓄積だけでなく、もう一度しっかりと勉強して教えたい」と大学院に入ったのが博士号挑戦のきっかけだ。子育てが一段落というタイミングもよかった。

博士論文は、「声と朗読」読むという行為に関する考察「聞くという行為に関する考察」「声の芸能の系譜」「坪内逍遙と森鴎外の朗読論争」「朗読論の推移」「国語教育と朗読」「朗読に関する脳科学・教育心理学の実験に対する考察」という8章。朗読とは何かを、科学、文化、教育などから多面的にひも解いた。

■日本語における独特の朗読の効果

ヨーロッパ言語は表音文字なので、読むことは話すことに直結する。ところが表意文字である漢字を含む日本語は、読むのと声に出すことは別。声に出して読むと急に、ぎこちなくなりがちだ。

「人それぞれに話し方のクセや調子があって、それが読むと出てしまうんですね。普段のおしゃべりならいいのですが、パブリックスピーキングの際にもそうしたクセは出ます。クセが強いと文意も伝わりにくくなります。文学作品に限らず朗読表現の練習をすれば、パブリックスピーキングの力も磨かれ

ると思います」

大学では、アナウンスやナレーション・スピーチの実習も指導する。最初は話の構成もきちんとしておらず、姿勢も悪かった学生が、授業で変わっていく。聴衆を見て、声も出て、しっかり話せるようになる。それならば、小学生など早い年齢で訓練をすれば、日本人も人前で話すことや自己表現することが、もっと上手になるはずと提言する。

■学問として成り立つのか不安だった

実は朗読は、音響学や脳科学、教育心理学等でも研究されている。それらによると、声に出して読むことが脳を活性化し、聞くことで癒されるとされ、特に発達段階の子どもには、読み聞かせなど、耳からの読書が重要と言われている。

「話し言葉教育の重要性は明治時代から指摘され



現在の肩書きは、フリーアナウンサー、関東学院大学講師、早稲田大学国際言語文化研究所招聘研究員、そして朗読家。

ているのですが、実際に行うのは難しいんです。ですから私も、この研究テーマが果たして学問として成立するのだろうか、と、憂慮していました。そうしたタイミングでこの博士号取得支援事業に応募し、面接を受けた際に、世の中に役立つ研究になるのだろうかとお聞きしたのです。先生方からは、大丈夫だから頑張りなさいと言っていたので、このまま続けていいんだと、励みになりました。早稲田大学の大学院には、私と同年代やそれ以上の方がたくさん在学していらっしやうって、年齢自体には違和感はありませんでしたが、私たちを見てくださった財団のみなさんの存在を知った時、とても嬉しく思いました」

■研究するほど深く広く大きくなっていく

博士号挑戦中やこれから学びたい方には、「自分を信じて続けてください。私もライフワークとして、朗読家としての芸を磨くこと、話し言葉と放送メディアの関係の研究などを進めて、生きた研究、社会に役立つ研究にしていきたいです」と語る。

「よく言葉と言われますが、ことばを音声化して初めて生じる訳です。声を大事にしたいですね。朗読をするのも聞くのも苦手な子が、朗読に触れる機会を増やすことで、面白いとか、気持ちいいとか受け取り方が変わっていきます。実は同時に聞く力も向上しているんですね。話す・聞くということは、普段は意識しないからこそ、本質を知りたいのです。研究すればするほど、深く広く大きくなってしましますが」